

トマスが登場する場面は3回あります。この場面で、トマスのひとりとなりが分かります。彼はイスラエル人らしい徹底した現実主義者です。

主イエスは、エルサレム神殿当局から、彼らが作りあげた宗教体制を覆す危険人物として、追っ手をかけられていました。弟子たちと共に、捕縛を逃れて潜んでいました。そこへ、主イエスの愛していたラザロが病気になったことが知らされます。ラザロは、エルサレムに近いベタニアに住むマルタ、マリアの弟です。ベタニアに見舞いに行けば、捕えられます。主イエスは「この病気は死で終わるものではない」と言われます。行かないことを告げられ、弟子たちはホッとしました。二日後「ユダヤ（ベタニア）に行こう」と言われます。弟子たちは「石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか」と行かないように訴えます。主イエスは「ラザロは眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く」と言われます。弟子たちは「眠っているのであれば、助かるでしょう」とベタニア行きにあくまで反対します。その時、トマスは「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言います。彼は、ご一緒なら、命を落としても構わない、それほど主イエスを愛し、その愛に殉じる心を持っていたのです。ただ、彼は現実主義者でしたから「一緒に死のう」と悲壮感を持って、否定的に捉えることしかできません。

最後の晩餐の後、主イエスはお別れの長い説教をしています。その中で「わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」と言われます。主イエスは、十字架の死と復活、そして聖霊による交わりを通して、神と結び合う道を開く、その道を知っているとされたのです。この時、トマスは「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか」と答えています。トマスは主イエスが示される、見えない神と結び合う道は理解できませんでした。主イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない」と言われます。彼は死んでもいいと思うほど主イエスを愛し、従っていましたが、人間の世界を超えた神との交わりを受け止めることができなかったのです。

主イエスは十字架の死から復活して、弟子たちにご自身を現されました。弟子たちは大きな喜びを体験しました。この時、トマスは弟子たちから離れていました。彼は、愛する主イエスは十字架で殺された、自分たちの宣教活動は終わったと、現実を冷徹に受け止めた。悲しみを舐め合うより、自分の道を行くと、離れたのではないのでしょうか。弟子たちは、そのトマスを探し出し「わたしたちは主を見た」、復活して生きておられると告げます。彼は、手とわき腹の傷あとを見、手を入れてみなければ、決して信じないと、復活をあり得ないこととして激しく否定します。そのトマスは弟子たちは8日間も引き止めます。この間、弟子たちとトマスの間で、復活について激論があったでしょう。彼は、復活を信じることをバカげたこととして、あざけり蔑んだことでしょう。ところが、復活した主イエスは現れ、傷あとを見せ、手を入れよと迫ります。トマスは「わたしの主よ、わたしの神よ」と言って、拝します。主イエスは「わたしを見たから信じたのか。見ないで信じる人は幸いである」と語られます。

私たちは見える現実を生きています。その中で、現実を超えた神を信じることができるか。それを問い続けることが信仰です。超越する神を信じる者は、愛の神と共にある自分を見出し、平安と勇気を得、幸いに与ることができます。